

厚生労働大臣賞（優秀賞）

当たり前の生活

東京都 東京学芸大学附属国際中等教育学校 二年 岡野 奈々

「ジャー。」

今日も水道からきれいな水が出る。これは、「当たり前」と思っていた。しかし、地球の裏側では、たった一口の水を求めて、多くの子も達が何十キロも歩く。世界では約九億人の人々が、汚れた水しか飲むことができず、生活に必要な水を得るために大きな負担を強いられている。同じ地球上で、同じ時代に生まれてきたにもかかわらず、こんなにも差があるなんて理不尽すぎると思う。

実際、以前私がインドネシアへ旅行した時のことだ。泊まっていたホテルの近くに川が流れていたのだが、その川の色を見て私はとてもショックを受けた。川は、晴れている間は灰色で、雨が降ると真っ茶色になった。油も浮いていて、とても強い悪臭がした。日本では、生活用水を下水処理場できれいにしてから海や川に放流するが、インドネシアのその地域では、下水処理場が整備されていないため、生活用水をそのまま川に流しているようだ。しかし、更に私が驚いたのは、その川で遊ぶ子供や、魚を釣ったり洗濯をしている大人がいたことだ。彼らは、きれいな水源が近くになかったり、あっても容易に手に入れることができないため、そのようににごったとてもきれいとは言えない水を、そのまま生活用水として使用せざるを得ないのだ。都心部で水道があっても、蛇口から流れ出る水は常にごっており、日本のようにそのまま飲んだり、料理に使用したりすることも不可能なのだ。私は、このインドネシアでの滞在を通して、きれいな透んだ水が日常にない生活の不便さをまざまざと感じた。と同時に、日本での「当たり前」だった水事情が実はとても発展的で、膨大な設備の整備によって成し得ていたということに気づかされた。きれいで安全な水に恵まれた日常生活に感謝し、それを維持していく努力をすることが、私達の務めだと改めて認識させられた。

この旅行で、日本の水を巡る環境に興味がわき、春休みを利用して江

東区にある東京都水の科学館というところに足を運んでみた。

そこでは、水の不思議と大切さを科学の視点で学び、水と水道への興味を深めることができた。普段の私生活の中で何気なく使っている水が、実は、大自然の恵みと摂理を有効利用し、そして現代人の知恵と技術によって支えられていることを詳しく知った。そして、蛇口から出てくる水一滴のありがたみを改めて痛感した。

そこで学んだことの一つに、水道管の繋ぎ目の構造がある。耐震性を高めるために、揺さぶっても引張っても繋ぎ目が抜け落ちない工夫がなされている。実際に、この耐震性の水道管が引いてあった場所だけは、あの東日本大震災の時でも壊れなかったそうだ。

他に、事故や震災等が起きても確実に水を送ることが出来るように、長さ約十六キロメートルもある原水連絡管を二本に増やしたり、老朽化が進んでいる箇所や古いタイプの水道管を使用している地域では、順次耐震性の高いものに取り替える工事が進められているそうだ。

このように、私たちの見えないところで、こんなにたくさん地道な努力がなされていることや、世界の水不足の人々のことを考えると、たった今もコップに入った水を捨てようとした自分が、とても恥ずかしく感じられる。私一人にできることは限られているが、それを無力ととらえず、各々が水の大切さを認識し、その意識を集約させることで、より多くの水の節水ができると信じている。だから、この当たり前の恵まれた水のある生活について、慢心することのないように日々、生活していかなければならない。そのために私も、まずこの一杯の水から大切にしていきたい。